

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	Effectiveness of a comprehensive mental health literacy educational programme for junior high school students: A randomised controlled trial examining changes in their knowledge, attitudes, and behaviour
別タイトル	中学生を対象としたメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの有効性:知識・態度・行動の変化を考察するランダム化比較試験
作成者(著者)	森, 良一
公開者	東邦大学
発行日	2023.03.14
掲載情報	東邦大学大学院医学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨.
資料種別	学位論文
内容記述	主査: 桂川修一 / タイトル: Effectiveness of a comprehensive mental health literacy educational programme for junior high school students: A randomised controlled trial examining changes in their knowledge, attitudes, and behaviour / 著者: Ryoichi Mori, Takashi Uchino, Masafumi Mizuno, Taiju Yamaguchi, Naoyuki Katagiri, Takahiro Nemoto / 掲載誌: Journal of Personalized Medicine / 巻号・発行年等: 12(8): 1281, 2022 /
著者版フラグ	none
報告番号	32661甲第1052号
学位記番号	甲第724号
学位授与年月日	2023.03.14
学位授与機関	東邦大学
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD26456977">https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD26456977</a>

# 博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

森 良一より学位申請のため提出した論文の要旨

学位番号甲第724号

学位申請者 : もり 森 りょう 良 いち 一

学位論文 : Effectiveness of a comprehensive mental health literacy educational programme for junior high school students: A randomised controlled trial examining changes in their knowledge, attitudes, and behaviour

(中学生を対象としたメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの有効性:知識・態度・行動の変化を考察するランダム化比較試験)

著者 : Ryoichi Mori, Takashi Uchino, Masafumi Mizuno, Taiju Yamaguchi, Naoyuki Katagiri, Takahiro Nemoto

公表誌 : Journal of Personalized Medicine 12(8): 1281, 2022

論文内容の要旨 :

背景・目的:

精神疾患全般の発症のピーク年齢は14.5歳であるとの報告があり、この年齢までには、援助希求に関する適切な行動変容が得られていることが理想的である。しかし、既存のプログラムのほとんどは高校生を対象としており、精神疾患の発症がピークを迎える年齢層に属する中学生を対象とした実践は限られている。そこで、本研究は、中学生の精神疾患に関する知識、メンタルヘル스에問題のある人に対する態度、援助希求の行動を改善するための「サニタ」と呼ばれる総合メンタルヘルスリテラシー(MHL)教育プログラムの有効性を評価した。

対象・方法:

参加者は、公立中学校1年生125名(介入群51名、対照群74名)である。50分間の授業を3回実施し、プログラム実施前、実施直後、および3か月後に自己申告式質問票(精神障害の理解度尺度であるMIDUS、日本語版報告意図行動尺度であるRIBS-J、援助希求行動を調査するための質問4項目の3つのまとまりからなる質問票)による調査を行った。並列グループデザインの個

人レベルのランダム化比較試験を実施した。

結果：

精神障害の知識 (MIDUS) では、授業後および3か月後で、時間の主効果またはグループ×時間の交互作用に有意差がみられた (テスト後B [95%CI]時間の主効果= -8.40 [-10.07, -6.73]、時間×グループの交互作用  $p = 7.36$  [5.14, 9.57]、 $<0.01$ ) (3か月後B [95%CI]時間の主効果= -6.14 [-7.81, -4.47]、時間×グループの交互作用  $p = 4.19$  [1.97, 6.41]、 $<0.01$ )。スティグマに対する態度 (RIBS-J future) では、授業後の時間の主効果またはグループ×時間の交互作用に有意差が見られたが (B [95%CI]時間の主効果= 2.20 [1.45, 2.96]、時間×グループ交互作用  $p = 1.85$  [-2.85, -0.85]、 $<0.01$ )、3か月後においては時間の主効果は見られたものの、グループ×時間の交互作用に有意差が見られなかった (B [95%CI]時間の主効果= 1.84 [1.85, 2.60]、 $<0.01$ 、時間×グループの交互作用  $p = -0.72$  [-1.72, 0.28]、 $p = 0.158$ )。援助希求行動については、授業後および3か月後の結果のいずれにおいても、時間の主効果またはグループ×時間の交互作用において有意差が見られなかった。

考察：

本研究は、総合メンタルヘルスリテラシー (MHL) 教育プログラム「サニタ」の有効性を多面的に検討するものである。このプログラムは、学校現場でどの教師でも実施できるように設計されている。私たちの知る限り、これは日本の中学生を対象としたMHL教育プログラムのRCTデザインによる初めての研究である。また、精神疾患の発症がピークを迎える年齢層に属する中学生を対象に、実際の行動変容も含めて同様のプログラムの効果を検討したRCTは世界的にも数少ない。

第一に、中学生に精神疾患に関する知識に対して授業後、3か月後に効果が認められた。精神疾患の発症のピークに近い12～13歳の時期に、精神疾患に関する適切な知識を習得することは、一次予防の観点から非常に重要である。

第二に、今回の結果ではRIBS-J得点(態度)の3か月後の効果は認められなかった。サニタのように、ビデオを使って精神障害者と間接的に接点を持つ方法は再現性が高いが、先行研究では、精神疾患を持つ人と直接接触することで、精神疾患を持つ人に対する態度が有意に改善されることが報告されているため、さらなる検討が必要である。

第三に、援助希求行動(「心の病について誰かに相談する」)の効果が認められなかったことは、対象者が一般的な中学生で、そのほとんどが健康であった可能性があり、短期的に支援を必要としていないことが考えられる。3か月より長い期間でフォローアップの調査を実施することが望ましいことを示唆しているかもしれない。

結論：

サニタMHL教育プログラムは、中学生に対して、精神疾患についての知識の向上に縦断的な効果を示したが、メンタルヘルスの問題を抱えている人々に対する態度、援助希求に関連する行動の向上は、効果が十分ではなかった。

## 1. 学位審査の要旨および担当者

学位番号甲第 724 号	氏 名	森 良 一
学位審査担当者	主 査	桂 川 修 一
	副 査	端 詰 勝 敬
	副 査	西 脇 祐 司
	副 査	中 野 裕 康
	副 査	村 上 義 孝
<p>学位論文の審査結果の要旨：</p> <p>日本のメンタルヘルスリテラシー(MHL)教育プログラムのほとんどは高校生を対象としており、中学生を対象とした実践は限られている。本研究は、中学生における精神疾患に関する知識、メンタルヘルスに問題のある人に対する態度、援助希求の行動を改善するための総合MHLプログラム「サニタ」の有効性を評価した。</p> <p>参加者は、公立中学校1年生125名(介入群51名、対照群74名)である。50分間の授業を3回実施し、プログラム実施前、実施直後、および3か月後に自己申告式質問票(精神障害の理解度尺度であるMental Illness Understanding scale(MIDUS)、報告意図行動尺度であるJapanese Reported and Intended Behavior scale(RIBS-J)、援助希求行動を調査するための質問4項目の3つのまとまりからなる質問票)による調査を行い、並列グループデザインの個人レベルのランダム化比較試験を実施した。</p> <p>精神障害の知識MIDUSでは、授業後および3か月後で、時間の主効果またはグループ×時間の交互作用に有意差が見られた(テスト後&lt;0.01、3か月後&lt;0.01)。スティグマに対する態度(RIBS-J future)では、授業後の時間の主効果またはグループ×時間の交互作用に有意差が見られたが(テスト後&lt;0.01)、3か月後においては時間の主効果は見られたものの、グループ×時間の交互作用に有意差が見られなかった(p=0.158)。援助希求行動の実施前、実施直後、3か月後のいずれにおいても、時間の主効果またはグループ×時間の交互作用において有意差が見られなかった。</p> <p>得られた結果から、精神疾患の発症のピークに近い12~13歳の時期に、その適切な知識を習得することは、一次予防として非常に重要であると考えられる。態度をみるRIBS-J得点の3か月後の効果が認められなかった点については、先行研究では精神疾患を持つ人と直接接触することで、態度が有意に改善されることが報告されていることから、ビデオを用いるプログラムの内容にさらなる検討が必要である。援助希求行動の効果が認められなかったことは、対象者が健康であったため、短期的に支援を必要としていないことが考えられた。3か月より長い期間でフォローアップの調査を実施することが望ましいことを示唆している可能性がある。</p> <p>学位審査会は、2022年9月28日に中野、端詰、桂川が参加して行われた。西脇、村上是書面審査として評価を行った。まず申請者より約20分間の研究報告があった後に質疑応答がなされた。質疑応答では、正規の授業とは別に実施されたか、調査実施にあたっての倫理的手続き、実施に際して生徒が受ける不利益、クラスごとの影響や男女差について、3か月後のフォローアップ調査のタイミングの適切性、RCTにおける割付法の選択について、欠測値の扱い、Time-Group interactionをどのように解釈するか、この研究の方向性について、などの質問がなされた。申請者はそれら全ての質問に適切に回答した。本研究は、日本の中学生を対象としたMHL教育プログラムのRCTデザインによる研究であり、対象者の行動変容も含めた同様のRCTは世界的にも数少ないことから貴重な調査研究であり、本研究は審査委員全員一致のもとで、学位に値するものと判断された。</p>		